

私は昭和50年に秋田高校を卒業しました。早いもので卒業してから40年近くたってしまいました。当時は看護師になるために大学という道は少なく、全国にわずか6校しかありませんでした。進学相談の際、担任の谷村先生が「中村さんは看護の道に進むために大学進学をあきらめるのですね」とおっしゃったことを覚えています。

時代は変わったものです。現在は看護大学の教員をしておりますが、秋田に戻ってくるまでの30年以上をほぼ在宅領域で実践者（訪問看護師やケアマネジャー）として活動していました。まだまだ在宅における医療や看護活動が一般的ではない頃から始めましたので、主治医との関係、療養者への支援の仕方、家族の捉え方など、お一人お一人の療養者との出会いによって学び、励まされ、確信しながらここまで来たように思います。

その確信の一つは「在宅療養は最期までその方らしく生きることを可能にする」ということです。在宅という介護の大変さ、悲惨さばかりがクローズアップされることが



多いと思います。しかし、在宅という療養者も家族も主役である場で、医療に生活を縛られるのではなく、医療を生活になじませながら共に大切な時を過ごすことによって、療養者本人もご家族も、ご自分の持つ力（自省力と呼びたいのです）を自然に発揮する姿を私は多く拝見してきました。そのような姿に学び励まされてきました。もちろん在宅の介護が大変でないとは言

心を込めて

在宅でできるケアを



中村 順子 (昭和50年卒)
日本赤十字秋田看護大学看護学部 准教授

いませんで、私たち訪問看護やさまざまなサービスを上手に使っていただきながら、是非家族に対し迷惑をかけるという視点だけでなく「自分らしく生きるにはどうしたら良いか」ということを考えてほしいものだと思います。

私が特にそう思うのは在宅における看取りにおいてです。日本では1970年代半ばまで、自宅で亡くなるの方が

多かったのです。家族が看取りを行ってきました。人が生まれ人が死ぬという営みは人々の生活の中に自然に存在していたと言えます。

しかし、医療の高度化、家族形態や家族機能の変化等により今や生まれるのも死ぬのも病院ということが当たり前となり、日常生活からは切り離されています。人は死から遠くなり、時々あなたか人も人は死なないと錯覚しているかの

切に、丁寧に下ろしていただきけるのではないかと考えてきました。そして、そのようにできる一つの手段として在宅があることを確信しているのです。

私が秋田に戻ってきたのは、秋田で看護教育をしたいということもありますが、どこにいても少し環境を整えれば自分らしく最期を迎えることができることを秋田でももっと根付かせたいという気持ちもあつたからです。

ような言動を目にすることもあります。しかし、人は命あるものですから、やがてその時を誰もが迎えます。自分だけの物語を生きぬき、その物語の幕を引くときが誰しも必ずやってきます。

「終わりよければすべてよし」という言葉があります。私は在宅や老人施設で多くの方を看取ってきましたが、最期に心をこめてケアさせていただくことで、物語の幕を大

天上天下

絶体絶命のピンチを幾度となくぐり抜けて3億キロの宇宙のあなたから地球に帰還した小惑星探査機はやぶさ。耐用年数を優に超す7年もの間宇宙に滞在して、小惑星イトカワから多数の微粒子を持ち帰った▼度重なるトラブルから奇跡の帰還を可能にしたのは、地上チームの強固な使命感と危機管理能力の高さであった。極限の軽量化と徹底したフェイルセーフ設計。日本の宇宙科学技術の粋を集めたはやぶさの快挙は、国民に大きな勇気と希望を与えた▼夢の続きは再来年に打ち上げられる「はやぶさ2」に引き継がれると思いきや、予算不足で黄信号がともっているという。今年度予算が6割もカットされ機材の発注が思うように進まないためだ。目先の利益を生まない国家事業は、コストと利益のはざままで揺れ続ける▼後継機のミッションは太陽系誕生の手掛かりをさらに探るとともに、生命の原材料物質の解明にも迫る。世界の主導的立場を追い求めてきた日本の宇宙技術開発がここで後退を余儀なくされるとしたら、夢の続きを見たい国民には何とも寝覚めが悪い。